

犬連れが集う公園でのフィールドワークの試み

仲 沙織

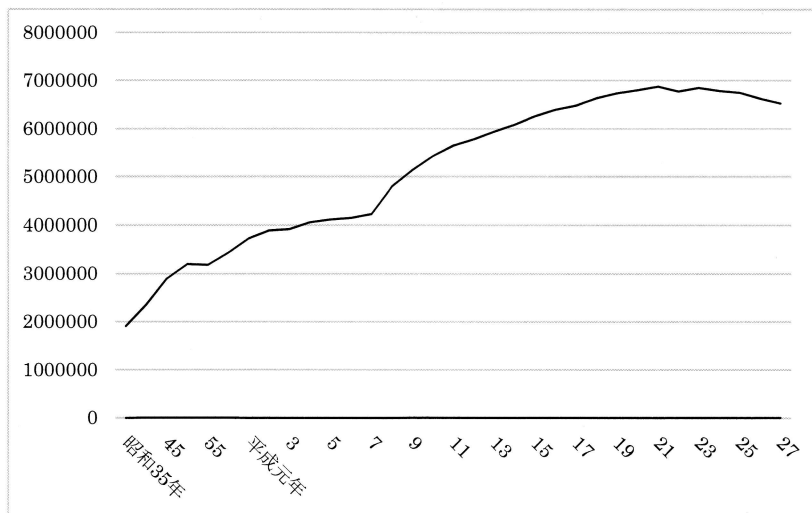
キーワード：犬の散歩，公園，フィールドワーク，つながり，人間関係

I 問題と目的

近年のペットブームはとどまるところを知らず，犬に限ってみても，ここ数年落ち着きを見せつつあるものの急激な増加の現状には目を見張るものがある（表1）。平成27年度国勢調査によると，我が国の犬の登録頭数は，年度末現在で6,526,897頭にのぼり，同年度の国勢調査による0～5歳児の総数6,031,675人よりも多い現状である。ドッグカフェ，ドッグラン，ペットホテル，トリミングサロン等の増加や，ペットと泊まれる宿，ペット可住宅の人気，また，2008年から特定非営利活動法人動物愛護社会化推進協会主催による犬の飼い主検定なども実施され，全国各地で毎回多数の受験者が集っている。

このように，犬は，近年，急速に私たちの生活の中に入り込んできている状況にある。対して，毎年5万匹を超える犬が自治体によって殺処分されている現状や，公共の場でのマナーの問題があることも忘れてはならない。犬の飼育には，定期的な運動の機会，いわゆる「散歩」が欠かせず，犬の散歩に注目した研究も多い（外井ら，1996，菊池・長田，2009・2013・2015，早川ら，2006・2008，小林，2013，星ら，2016）。しかし，散歩の場所ついて，自宅から徒歩圏外の公園を選択し，犬連れで集う飼い主に焦点を当てた研究は見当たらない。そこで，本研究では，犬連れが集う公園でのフィールドワークを通して，犬の飼い主が公園でどのように過ごしているのか，その具体的な言動や飼い主同士のやりとりを明らかにし，空前のペットブームにおける散歩の意味を検討する。

表1 犬の登録頭数の年次別推移（厚生労働省の調査数を加工したもの）



II 方法

1. フィールドの概要

本研究のフィールドは、人口約60万人の地方都市Aにおいて、大型観光船が接岸できる岸壁を整備する目的でX-7年より埋め立て工事が始まり、X-5年より、本来の目的と併せて、県民や環境客が憩い、探索できる緑地空間として開放されたB公園である。B公園は、開放時間は季節によって異なるが、調査時は午前7時から午後7時まで（11月～3月）となっている。大型の商業地が連なる国道から埋め立て地へと橋が架けられており、大規模な駐車場を備え、不定期でフリーマーケットやウォーキング大会などのイベントも開催されている。周辺には住宅地はほとんど見当たらず、自家用車で犬を連れて来る人が多い。敷地3面を穏やかな内海に囲まれ、芝生広場や木々の中の遊歩道、公衆トイレ、ベンチやテーブルが設置され、昼夜を問わず、散歩やジョギングをする人や、ピクニックをする家族連れ、スポーツを楽しむ若者で賑わっている。公園の一番奥の芝生スペースには、犬を散歩させる人々が多く集まっており、特に夕方が混んでいる。

2. データ収集手続き

(1) 観察概要

X 年 11 月から X+1 年 3 月の約 5 か月間に計 38 回、およそ週 2 回、16 時から 18 時の各 2 時間、平日と土日のどちらかを利用し、延べ時間約 76 時間の観察を行った。観察対象は犬の飼い主、観察場所は、B 公園内、入り口から一番奥に位置する芝生スペース(図 1)で、観察者は石付近を中心として、芝生スペース内を移動することもあった(図 2)。

図 1 B 公園見取り図

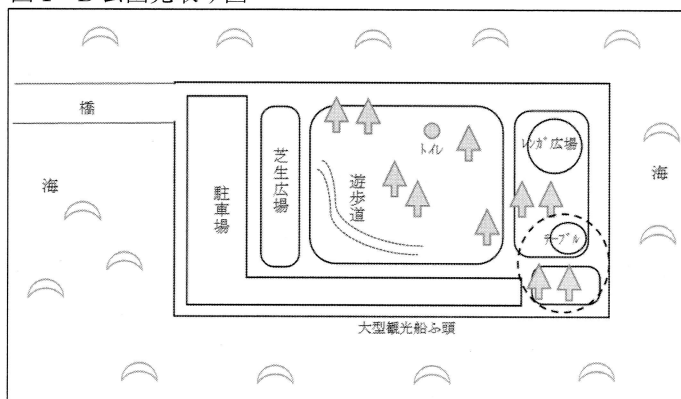
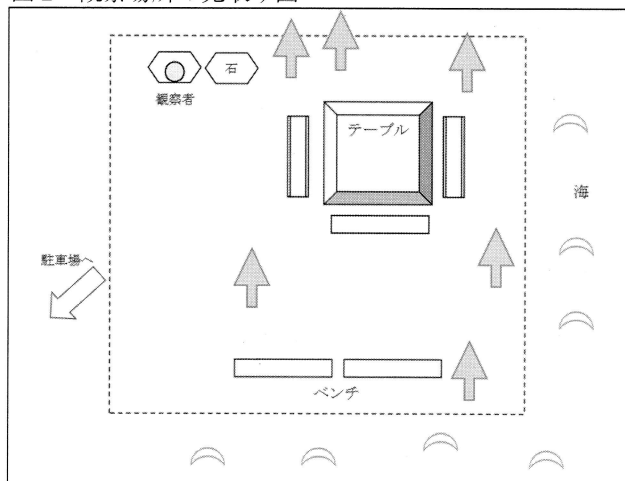


図 2 観察場所の見取り図



(2) フィールドでの役割

観察者は、観察者のペットである小型犬Cと共に参与観察を行った。ペットを抱き石に座っての観察を主として、時にペットと共にフィールド内を移動しながら、テーブルを囲む飼い主や芝生に集う飼い主の言動についてメモをとった。観察者はフィールド内で「消極的な参加者（箕浦，1999）」として参与していたが、フィールドワーク開始後約1ヵ月経過すると、観察者と小型犬Cに何度か出会う飼い主から話し掛けられる場面が見られ、挨拶を交わしたりお互いのペットの話題をすることもあった。

(3) リサーチクエストの生成

観察開始後、約1ヵ月経過した頃より、決まった時間によく見かける飼い主や、犬と歩くだけでなく決まった場所に止まり時間を過ごす飼い主、繰り返される飼い主同士の交流の様子を認めた。また、多くの飼い主が、徒歩ではなく自家用車でB公園へ集っていた。そこで、「飼い主は公園でどのように過ごしているのか」、「公園を犬の散歩場所に選ぶのはなぜか」、という2つのリサーチクエストを生成し、定期的かつ比較的長い時間を公園で過ごす飼い主に焦点を絞り、観察及び分析を行うことにした。

3. 分析手続き及び倫理的配慮

B公園において、犬の飼い主はどのように過ごし、なぜ公園に集うのかというリサーチクエストを検討するために、飼い主の言動に注目して質的帰納的方法を用いカテゴリーを生成した。フィールドノーツをデータ化し、出来事のとまとまりごとに継時的に並べ、何度も読み返し全体を把握した。次に、研究対象者の発言や行動を抜き出し、ひとまとまりごとに切り分け、それら全ての断片を吟味して意味のとまとまりごとに分け、一つの意味単位とした。次に、全ての意味単位を集めて全体を俯瞰し、似た意味単位を集め一つの意味群として、意味群を表現する言葉に置き換えた。この作業を、これ以上まとめることができなくなるまで繰り返して抽象度を高めた。最終的に残った意味群を俯瞰して、

研究対象者の体験について記述した。質的分析にあたっては、質的研究に精通した研究者からのスーパーバイズを受け、信用性の確保に務めた。また、フィールドノーツを取る際、対象者の発言に出てきた固有名詞は記号化し、対象者が特定されないよう配慮した。

Ⅲ. 結果

計 38 回、延べ時間約 76 時間の観察で得られたフィールドノーツから、飼い主の言動に注目して質的帰納的方法を用い、3つのカテゴリーと12のサブカテゴリーを生成した。カテゴリーを< >, サブカテゴリーを<< >>で示す。公園で犬の散歩を行うことは、<犬のよりよい生を目指す>, <飼い主が得る効果>, <つながりの構築・強化>の3つの意味を持っており、<犬のよりよい生を目指す>は、<<健康管理>, <<しつけ>, <<安全確保>, <<社会性促進>, <<遊びの拡大>の5つのサブカテゴリーを含み、<飼い主が得る効果>は、<<親子体験>, <<心身のリラックス・癒し>, <<体調管理・体力増進>の3つのサブカテゴリーを含み、<つながりの構築・強化>は、<<犬を媒介とした限られたつながり>, <<他飼い主のサポート>, <<生きがいの共有>, <<家族関係の構築・強化>の4つのサブカテゴリーが含まれていた(表2)。

表2 公園で犬の散歩を行う意味

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容
犬のよりよい生を目指す	健康管理	<ul style="list-style-type: none"> ・排泄物を確認し、「あ、やわらかいね、お腹の調子悪いかね」と、女性が話し、排泄物を片付ける間、女兒は「D、大丈夫ー？」と犬の背をなでながら話し掛ける。 ・「(観察者との会話の中で) この子一人っ子だから、ここに来るとお友達と遊べて運動になるのよ。メタボちゃんだから運動させないと」
	しつけ	<ul style="list-style-type: none"> ・他の犬を見て吠え始めた犬Eに、「こら、Eちゃん!」と厳しい口調で言い、リードをびっと引く。犬Eが吠えるのを止めると「よしよし、いい子ね」と頭をなでる。 ・リードが外された犬Fが飼い主から離れて歩いて行き、気付いた飼い主が「おい!F!」と大きな声で呼び、戻ってきた犬Fを抱き上げ「だめやろが!」と強く言い聞かせる。 ・じゃれあっているうちに自分の犬Fが他の飼い犬Gに乗りかかっているのを見付け、「おいおい!」と走り寄り、犬Fを抱き上げる。犬Fの頭を軽くはたき、「恥ずかしいことすんな」と強い口調で言う。 ・おもちゃをずっとかじっている犬Hに「わ、だめだめ」と叱り、「おすわり!伏せ!」と指示し、おもちゃを取り上げる。
	安全確保	<ul style="list-style-type: none"> ・ジョギングして近付いてくる人とは反対の方へ犬Eのリードを引っ張り、犬Eが通行人と間近で擦れ違わないようにする。 ・大型犬が近付いてくると、小型犬Iを抱き上げる。 ・「(観察者との会話の中で) ここはさ、車が来んからいいよね」 ・「(観察者との会話の中で) 近所歩かせたって危ないし、排気ガスまみれでしょ」
	社会性促進	<ul style="list-style-type: none"> ・飼い主の後ろに隠れる犬Jに「ほら、遊んでおいで」と、リードを引いて犬の集団の中に引っ張って行く。 ・「J、見て。みんなかけっこしてるよ」と話し掛ける。 ・「すみません、うちの子(犬)、小さい子(犬)に意地悪なんです。ほら、E、お兄さんなんだから優しくね」 ・ジョギング中の女性が「かわいい、触ってもいいですか」と立ち止まると、「どうぞー。ほら、こんにちわはしなさい」と犬Lの背中を女性の方へ押し、なでてもらう様子を微笑みながら眺める。

	遊びの拡大	<ul style="list-style-type: none"> ・「家の中狭いからねー。たまに走らせんと」 ・「(観察者との会話の中で) 他の子たちと追いかけてどこかできるでしょ。見ててすごく楽しそうだし、毎日連れて来てやりたいけど、もっと近かったらねー」 ・ボールを投げ「ほい、取ってこーい」と、多頭数で追いかせさせ、追いかけない犬Kに「おい、お前も走らんか」と違うボールを投げる。ボールをくわえて戻ってきた犬Kに「よしよし」と頭をなで、繰り返しボールを投げる。
飼い主が得る効果	親子体験	<ul style="list-style-type: none"> ・「Oちゃんママ、こんにちはー」「あ、Sちゃんママ、寒いですねー」と、お互いを犬の「ママ」、犬を「うちの子」と表現して会話する。 ・「寒いねー」と犬Sに話し掛け、「寒い寒い、走ろっかねー」と言って小走りで走り、犬Sと時々顔を見合わせて「よいしょ、よいしょ」と声を掛ける。一時走ると、「休憩ねー」、「Sちゃん頑張ったねー、」と目を合わせてなでる。 ・観察者が犬を連れていいると、「あ、ミックス、かな?」と他の飼い主が話し掛けてきて、観察者が犬種を説明する。別れ際「じゃあどうも」と観察者に挨拶した後、犬に向かって「ママとお散歩いいね。またね」と話し掛ける。 ・犬が遊んでいる様子を繰り返し写真に撮り、おもちゃやボールを使っていい構図を探したり、犬に近付いて「こっちこっちー」とレンズを見るように促したりする。
	心身のリラックス・癒し	<ul style="list-style-type: none"> ・犬Tのリードをズボンのベルトにくっつけており、両手を上着のポケットに入れ、ゆっくりとしたペースで芝生の周りを歩く男性。途中立ち止まり、海を眺め大きく伸びをする。 ・ベンチに並んで座り、30分近く海の方を眺める男女。足元に犬Uが伏せて目をつぶっており、男女は時々犬を見て会話をしたり、飲み物を飲んだりする。 ・ベンチに横になり、女性の膝枕で目をつぶっている男性。女性は犬Vをもう片方の膝に抱き、携帯で写真を撮る。 ・公園を歩いた後ベンチに座り、犬Sを膝に呼び寄せ、体をさすったり頭をなでたりする女性。時折犬Sに話し掛け、目を合わせて微笑んだり、携帯で写メを撮ったりする。・犬Eの飼い主女性が、「わー、ふわふわ! 触ってもいいですかー」と大型犬Wの飼い主に話し掛け、屈んで犬Wをなでながら「わー、気持ちいい! 癒されるー」と笑顔で話す。

	体調管理・ 体力増進	<ul style="list-style-type: none"> ・「(観察者との会話の中で) お互い年寄だから足腰鍛えて長生きせんと」 ・犬Tと海の近くまで歩いていき、リードを地面に置いて、体の曲げ伸ばしや屈伸、深呼吸をする男性。 ・「(観察者との会話の中で) 運動っていったら、唯一この散歩だけよー。散歩がなかったら引きこもってるわ」 ・「(観察者との会話の中で) もー、毎朝起こされるでしょ。そうすると、嫌でも毎日早起きよ。そうしたら夜早く眠くなるし、もう小学生よ、小学生」
つながりの構築・ 強化	犬を媒介とした 限られたつながり	<ul style="list-style-type: none"> ・大型犬Lを連れた老夫婦が遊歩道をゆっくり歩き、他の飼い主とすれ違う度に笑顔で頭を下げ挨拶をする。お互いの犬をなでる。 ・犬Mを連れた男性に、「お、来ましたな」と手を振り、犬同士を遊ばせながら、「やっぱKとMは相性いいんやなあ」、「今日は冷えるよなあ」と会話する。 ・「(観察者との会話の中で) 話したりね。楽しみなのよ。家にいてもね。この子もおばあちゃんとずっと二人じゃつまんないって」 ・「あー、Nちゃん久しぶりー。こんにちはー。E、よかったね、Nちゃん会えたねー」と、相手の犬Nをなでる。 ・「あ、それかわいい。どこのやつ?」と犬の服を褒められ、「あー、これ、この前通販でゲットしましたー」と笑顔で答え、「えー、いい、いい。似合ってる、かわいい」と更に褒められる。褒められた女性は「そうですかー、わーい」と嬉しそうに犬Eをなでながら笑う
	他飼い主の サポート	<ul style="list-style-type: none"> ・他の犬たちと一緒にボールを追いかける知り合いの犬を見ながら、「いいなあ、Nちゃん、誰とでも遊べて。うちの子内弁慶で困るー」と自分の犬Eを抱きながら、Nの飼い主女性に話し掛ける。「慣れだよ、慣れ」、「うちも最初は全然だめだったよ」と女性に返される。 ・他の犬に向かって吠えるのを叱る女性に、「慣れるとね、大丈夫だけどね」、「近付けちゃうと案外いけるけどね」と話し、「うちの吠えよったけど、4歳くらいになったら落ち着きましたわ」と話す。 ・「Fちゃん、あっち行きましたよ」と、犬Fが遠く離れて行くのを、その飼い主に知らせる。「お、すんません」とその飼い主は急いで犬を呼び寄せる。 ・「また太ったみたいで」と、犬Oの体型を気にする女性に、「えー、そうかなー。Oちゃんいっぱい走ってるのにね」、「うちの子はヒルズのダイエットフード食べさせてるよ」と、ローカロリーのドッグフードについて教える。 ・「(観察者との会話の中で) いろいろお話し聞けますし、しつけ方とか…。あ、病院とか、犬の。ネットより参考になりますよ」

生きがいの共有		<ul style="list-style-type: none"> ・他人の犬Pの写真を現像してきており、「奥さん、この前の」と飼い主に渡し、「えー、いつもすみませーん！わー、かわいく撮ってもらってるー！」と写真を受け取る。他にも数枚写真を持ってきており、他の犬が来るとかばんを探って写真を渡す。「あらー、えー、こんなにしてもらって。お支払いします。」と相手が現像代を払おうとすると、「いや、いらんです。自分とこのついでにしたもんなんで。」と笑顔で話す。 ・同じ種類の犬を連れた女性同士が、その犬種特有のカットの仕方やカラーについて、「あー、わかるわかるー」「そうそう！そうなのよー」、「やっぱりトイプーはレッドでしょう」と会話。
家族関係の構築・強化		<ul style="list-style-type: none"> ・男性が大型犬Qのリードを持ち、横に女兒がスキップをしながらついてきて、「私も持たたいー」と男性に話しかけてる。「危ないから一緒に持とう」と二人でリードを握り、「そうそう、こっちにグッと引っ張って」と男性に助言されながら嬉しそうに歩く。 ・小学低学年と高学年くらいの子どもと、おそらく両親の4人で、1匹の犬Rを散歩させる。兄弟が代わる代わるにリードを持ち、家族で会話をしながら公園を一周する。 ・老夫婦がベンチに座り、談笑。側に大型犬Lが寝そべっている。

IV. 考察

今回のフィールドワークから、以下のことが導き出された。犬の飼い主は、犬連れが集う公園で散歩させることで、＜犬のよりよい生を目指す＞、＜飼い主が得る効果＞、＜つながりの構築・強化＞を期待していることが窺えた。

飼い主は、犬の《健康管理》、《しつけ》、《安全確保》、《社会性促進》、《遊びの拡大》を通して、犬のよりよい生を目指しており、また、《親子体験》、《心身のリラックス・癒し》、《体調管理・体力増進》効果を得ることができ、《犬を媒介とした限られたつながり》、《他飼い主のサポート》、《生きがいの共有》、《家族関係の構築・強化》の、犬を媒介とした人間関係の構築を行う場として、公園での散歩に意味を見出しているものと考えられる。

現代において、飼い主は、犬を単なる動物としてだけではなく、子どもや家族の一員として愛情や保護、養育の対象としており、福祉の視点を持って捉え

ていることが窺える。その中で、犬は、本来の生態系に備わった特性とは異なった行動を求められ、様々な役割を託された、複雑で意味に満ちた存在となっていると考えられる。これらのことを踏まえ、以下に今回のフィールドワークから得られた知見について述べると共に、今後の課題についても考察していく。

1. ヒト社会における犬の役割の変化と犬の散歩から飼い主が得る心身への効果

近年の空前のペットブームを概観し、猪熊（2001）は、現代のペットとしての犬について「ヒトがつくりあげた動物である」とし、「ヒト社会のなかではじめて価値が出てくる社会的生き物である」と述べている。また、James,S.（1999）は、人間が近代の犬種を作り出す過程の中で、オオカミの社会制度の重要な機能の一つである、群れで生活し、群れの最高地位にある雄と雌が他のメンバーの繁殖行動を完全に抑え込むという役割を奪って支配してきた、と、犬の生態的特性と行動的特性を変貌させてきたことを述べている。また、佐伯（2015）の大規模なWEB調査では、犬の飼育場所が屋内1,660件（83%）、屋外340件（17%）という結果であり、かつての番犬としての防犯目的の飼育から、屋内で寝食を共にする飼育様式へと大きく変化していることが分かる。また、同調査では、動物飼育に対する感情について、「生活に安らぎが生まれる」2,199件（71%）、「家の中が明るくなる」1,966件（63.5%）、「家族の会話が増える」1,809件（58.4%）、「寂しさを軽減できる」1,453件（46.9%）、「生きがいができる」1,066件（34.4%）、「動物を通じて人間関係が広がる」1,052件（34.0%）と続き、「防犯や留守番に役立つ」580件（18.7%）を大きく上回った。今回のフィールドワークでも、飼い主が犬の《安全確保》に気を付けながら、《社会性促進》や《遊びの拡大》を促しており、飼い主を守るという役割が逆転し、飼い主が犬を保護し、《親子体験》をしながら犬を育てていくという飼い主の存在が認められている。また、《社会性促進》や《遊びの拡大》を可能にするためには、他の犬、つまり仲間の存在が必要であり、敢えて同じ時間に同じ場所に集合するといった行動につながっているものと考えられる。さらに、家庭と比べて問題行動が発生しやすい環境で、適宜しつけを行ったり犬の社会性を促進させるよう

に働きかけたりし、犬がより人間社会に受け入れられ、人間社会に適応し、家族の一員として暮らしていけることを目指しているものと考えられる。

さらに、犬に《心身のリラックス・癒し》を得る存在としての役割が見出されていることが明らかとなった。この役割に特化した動物介在療法、すなわちアニマルセラピーについても、セラピー犬が介護施設や病院等で活躍しており（熊坂, 2012）、緩和ケア病棟での調査では患者のみならずその家族や職員にとっても癒し効果が期待できると報告されている（白木ら, 2016）。

散歩の場の選択について、外井ら（1996）の調査では、犬の散歩コースの選択理由として、水辺、風景、安全性、落ち着きなど、自然や静けさを好む傾向が明らかとなっている。今回のフィールドも、海岸埋め立て地であり、四方を穏やかな内海に囲まれた立地で、木々や花々が整備され、周辺の喧騒から比較的離れた空間であり、飼い主に選択されやすい場であると考えられる。また、犬の散歩行動の分類では、「夜間型」と「日課型」に分かれると結論付けており、本研究の調査を平日または土日の16時から18時の2時間に限定していたことから、本調査対象者は「日課型」に属する可能性が高いと考えられる。

早川ら（2006）の調査では、飼い主と犬との間で健康状態に正の有意な関連性が認められ、また、飼い主の健康状態は犬との散歩時間との間に有意な正の相関が認められている。早川ら（2006）は、「飼育者にとっては犬と暮らすことにより身体活動時間が増加し、健康の維持増進に一部関係している可能性が示唆された」と結論づけている。今回のフィールドワークでも、《体調管理・体力増進》を目的として散歩をしている飼い主の存在が明らかとなっている。また、星・望月（2016）は、全国の在宅高齢者を対象とした犬猫飼育や世話の実態及びその後の生存との関連を分析し、犬猫を飼育するだけでなく、世話するほど主観的健康観が維持され2年後生存率と累積生存率が維持されていたと報告している。今回は飼い主の年齢層を絞っておらず、《体調管理・体力増進》を目的として散歩をしている飼い主について、年齢による目的の違いがあるのか追視の必要性がある。

今回のフィールドワークの結果から、飼い主たちは、犬に見た目のかわいら

しさや従順さを求め、《しつけ》を繰り返して行動をコントロールし、かつての番犬としての役割が薄れ、飼い主に《親子体験》の機会や《心身のリラックス・癒し》を与え、《体調管理・体力増進》が期待でき、満足感を与える存在として新たな役割を見出されてきているものと考えられる。

2. 犬が媒介となる人間関係

菊池・長田（2015）の調査では、犬の飼い主は、単に犬を連れて歩くという行為以外にも、座って休む、ベンチに座る、カフェで座る、犬同士を遊ばせること等、自然に会話や交流が生じ易い状況が作り出されていることが明らかとなっている。また、交流の条件として、十分な道幅や、交通量の少なさ等、「犬の散歩」の行いやすい環境条件を指摘している。今回のフィールドは、市民の憩いの場として整備された公園であり、菊池・長田（2015）が指摘した交流が生じやすい状況、犬の散歩の行いやすい環境条件を満たしていると考えられる。今回のフィールドワークでは、この、交流が生じやすい状況の中で、犬を媒介とした人間関係が構築されている場面が認められた。

また、飼い主同士の交流の様子の観察から、公園での散歩が犬のためのものだけでなく、飼い主自身のために行われていることも明らかとなった。猪熊（2001）は、「イヌの存在は他人との交流に際して大変な促進効果をもたらす」とし、「イヌを連れていてことによって、面識のないあかの他人が心を開き話し掛けてくる、あるいはイヌのことについて話しあうことができる。イヌはまさしく社会的な潤滑油として機能する」、と述べている。今回のフィールドワークでも、飼い主たちは、挨拶を始めとしてお互いの犬を介して会話を繰り返していた。その際、お互いを犬の「お母さん」や「ママ」と呼び合っていた。菊池・長田（2009）は、犬の飼い主のパーソナル・ネットワークについての調査結果を踏まえ、「ネットワーク成員間で互いの名前を知ることは、自己開示の初歩的段階とすることができる。しかし、「犬の散歩」のネットワーク成員については「犬の名前」しか知らない人でも、「犬」を介した相互認識により関係性を維持していることが明らかとなった」、「犬」を介した相互認識のもと

に、…(中略)…あまり警戒心を持たずに、居住地域周辺の人々と交流関係を形成することができたものとする」と述べている。今回のフィールドワークでも、《犬を媒介とした限られたつながり》を維持している飼い主の存在が明らかとなっており、菊池・長田（2009）の調査結果を裏付けるものである。また、飼い主同士の会話について、小林（2013）の調査では、飼い主はペットを通じて10から20人の新たな知り合いを得て、ほぼ全員の研究協力者が散歩時に他者と会話を交わしていることが明らかになっている。今回のフィールドワークでも、飼い主同士が会話する場面が多く見られ、犬連れが集う公園での散歩の目的として、飼い主同士の交流を期待していることが窺えた。

河合（1996）は、自身の経験から、青年期のクライアントに対してまず、好きなことや好きなものを尋ねるようにしていると述べ、何かを“好き”と感じるとは、内からの情報の最もたるものであり、それはどのようなことであれ、CIの好きな話をこちらが一生懸命聞いていると、そのことを通じて人間関係も深まるし、どのような可能性が存在しているかが解ってくる、としている。犬を媒介とした人間関係では、初対面の段階から、お互いの“好き”なもの、すなわち“犬”が明確に提示され、それは「内からの情報の最もたるもの」であり、「そのことを通じて人間関係も深まる」ことにつながると考えられる。また、安部（2010）も、グループのファシリテーターとしてメンバーを「つなぐ」ことを試みる際、最初にメンバー間の共通性を取り上げ、「メンバー間の共通性を取り上げることによって、グループの中に共通項が形成され、グループの仲間関係（凝集性）を強めることができる」、と述べている。公園に集う飼い主たちの“共通性”、すなわち“犬を飼っていること”、“犬が好きであること”、“公園で犬を散歩させる習慣があること”などの共通項が容易に形成され、「グループの仲間関係（凝集性）を強めることができる」と考えられる。その、犬を媒介とした仲間関係の中で、《家族関係の構築・強化》、《他飼い主のサポート》、《生きがいの共有》を生じさせるのではないだろうか。

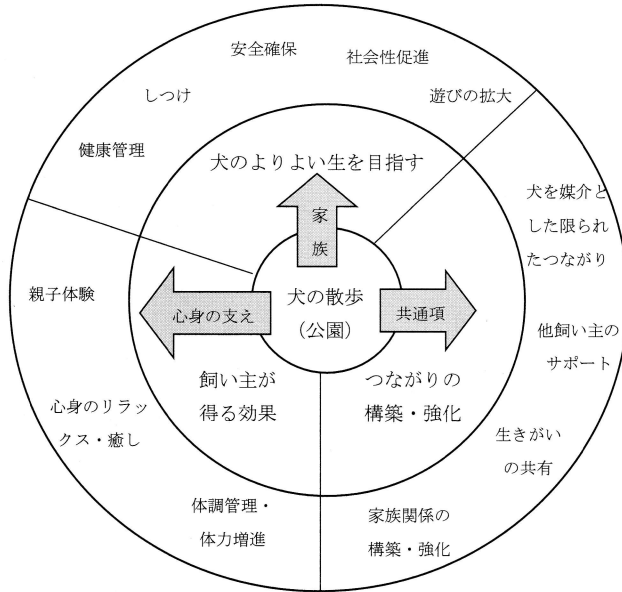
小林（2013）は、見知らぬ他者との交流について、「犬を介することで、新たな関係を築くのに、氏名や職業、社会的立場・経済状況などを開示する必要

もなく、それもまた新たな関係獲得に大きな役割を果たしている」,「関係の中での地位が存在しにくく、多様性が認められる犬仲間のつながりにより、ネットワーク形成の自由さや地域活動への気軽な参加が可能になるのではないか」と述べている。今回のフィールドワークで認められた、飼い主同士の犬が媒介となる人間関係の構築についても、小林（2013）が指摘しているように、人間関係構築段階初期の探り合いや駆け引きを抜きにでき、深く個人的な感情や背景に入り込み過ぎず、共通の話題、すなわち“犬”に関する話題のみで関係性を保つことのできる、自由度の高い気軽な場となっているのではないだろうか。

3. まとめと今後の課題

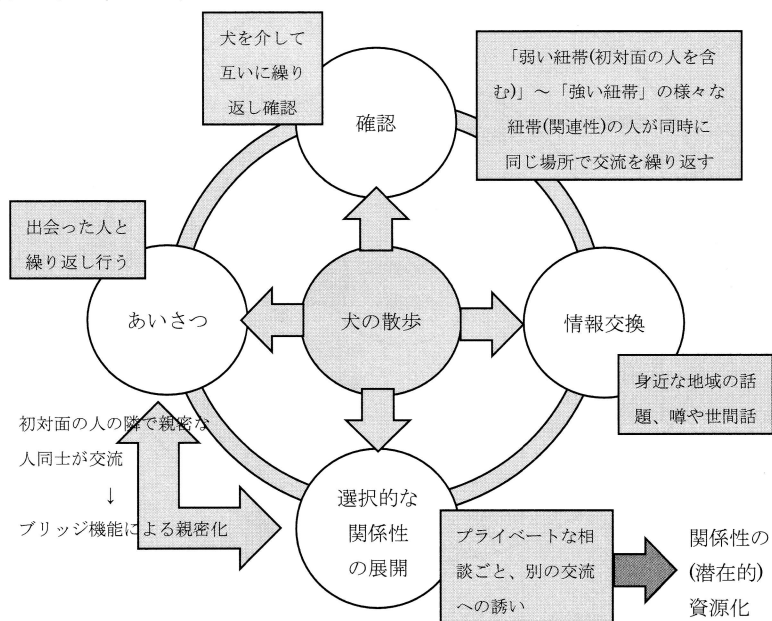
徒歩圏内（自宅近隣）ではなく、整備された公園に車で集う犬の飼い主のフィールドワークにより、その目的や意味について検討した。その結果、犬は、本来備わっている生得的性質とは異なった役割を持たされており、飼い主は＜犬のよりよい生を目指す＞、＜飼い主が得る効果＞、＜つながりの構築・強化＞を期待していることが窺えた。この期待をかなえるためには、安全が確保され、自然が豊かな「公園」という場と共に、犬連れの飼い主が集うという「公園（場）」,「複数の犬」,「複数の飼い主」が必要であり、「散歩」を繰り返すことで、飼い主は＜親子体験＞,＜心身のリラックス・癒し＞,＜体調管理・体力増進＞効果を得ることができ、仲間との＜犬を媒介とした限られたつながり＞,＜他飼い主のサポート＞,＜生きがいの共有＞,＜家族関係の構築・強化＞を経験する可能性が示唆された。公園に集う飼い主にとっての散歩の意味のイメージ図を図3に示す。

図3 公園に集う飼い主にとっての散歩の意味（イメージ図）



地域性について、都市と地方都市のペットに対する飼育目的や犬とのかかわり方に違いがあるとの調査結果（早川ら, 2008）がある。また、菊池・長田（2013）の、高齢者を対象とした調査では、飼い主は犬の散歩の中で、単に「犬の散歩」で出会った人と「あいさつ」を交わすのみならず、犬を介して互いを繰り返し「確認」し、身近な地域の話や噂話や世間話を通して、互いの「情報交換」を行う中で、選択的な「関係性の展開」（プライベートな相談ごと、別の交流会への誘い）の機会を得ていることを明らかにしている（図4）。しかし、今回のフィールドワークでは、地域性や飼い主の年齢、性別は考慮しておらず、「選択的な関係性の展開」については、データを得ていないため、長期の調査継続と飼い主の属性に応じたデータの精査の必要性がある。

図4 『「犬の散歩」をきっかけにしたネットワークの資源化（イメージ図）』（菊池・長田，2013）



<付記>

本論文は日本保健福祉学会第30回学術集会の研究報告を加筆修正したものです。当日貴重なご意見をくださった先生方に感謝いたします。

V. 参考文献

- 安部恒久（2010）．グループアプローチ入門－心理臨床家のためのグループ促進法．誠信書房．
- James Serpell（原著・編集）（1999）．The Domestic Dog－itsevolution,behavior and interactions with people－．犬－その進化 行動 人との関係－．，森裕司（監），武都正美（訳），チクサン出版社．
- 早川洋子，林文明，野呂和夫，圓尾拓也，江川賢一，荒尾孝，稲葉裕（2006）．健

- 康づくりのための新たなアプローチー人と犬の健康状態の関連性 1ー. 山野研究紀要, 14, 91-101.
- 早川洋子, 小野正人, 新井今日子, 江川賢一, 荒尾孝, 稲葉裕 (2008). 犬の重たる飼育者の身体活動量と生活習慣病リスクの関係. 民族衛生, 74(2), 45-54.
- 星旦二・望月友美子 (2016). 我が国の高齢者における犬猫飼育と二年後累積生存率. 社会医学研究, 33(1), 99-110.
- 猪熊壽 (2001). アニマルサイエンス③イヌの動物学. 林良博・佐藤英明 (編), 東京大学出版会.
- 河合隼雄 (1996). 大人になることの難しさ [新装版] 子どもと教育. 岩波書店.
- 菊池和美・長田久雄 (2009). 「犬の散歩」をきっかけとする飼い主のパーソナル・ネットワーク. 人間・環境学会誌, 12(2), 21-30.
- 菊池和美・長田久雄 (2013). 地域コミュニティにおける高齢者の「犬の散歩」をきっかけとした交流. 応用老年学, 7(1), 33-41.
- 菊池和美・長田久雄 (2015). 地域の社会関係形成における「犬の散歩」の影響ー全国の犬の飼い主2000名への調査結果ー. 帝京平成大学紀要, 26(1), 7-14.
- 小林真朝 (2013). 犬の飼育から人々が得るもの. 聖路加看護大学紀要, 39, 1-9.
- 厚生労働省. 都道府県別犬の登録頭数と予防注射頭数等(平成22年度～平成27年度). <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou10/01.html> (2017年7月31日取得).
- 熊坂隆行 (2012). アニマルセラピー動物介在看護の現状と展望. 本の泉社, 東京, 28-29.
- 箕浦康子 (編著) (1999) フィールドワークの技法と実際ーマイクロ・エスノグラフィー入門. ミネルヴァ書房.
- 佐伯潤 (2015). 家庭飼育動物 (犬・猫) の診療料金実態及び飼育舎意識調査結果の概要. 日本獣医士会雑誌, 68(6), 336-351.
- 白木照夫・小谷良江, 岡村典子, 浅田知香, 松本久子, 坂田恵美, 西藤美恵子, 藤岡邦子, 間保季, 平田久美 (2016). 一般病院緩和ケア病棟における動物介在活動. Palliative Care Research, 11(4), 916-920, 日本緩和医療学会.

総務省統計局. 平成27年国勢調査. <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka.htm> (2017年7月31日取得) .

外井哲志, 坂本紘二, 井上信昭, 中村宏, 根本敏則 (1996) . 散歩行動の実態とその類型化に関する研究. 土木計画学研究・論文集. 13, 743-750.

A fieldwork at a dog park

NAKA Saori

Abstract

A field research was conducted at a dog park to investigate the purposes and the meanings for the dog owners to take an effort to go to a dog park instead of walking around their neighborhood. It was found that dogs had roles that were different from their innate nature. The dog owners expected dogs to “have better life”, “support the owners physical and psychological health”, and “give the owners the opportunity to socially connect with other owners and strengthen the relationships.” In order for these expectations to be met, a dog park must attract many dogs and owners as well as being safe and rich in nature. It was also suggested that by walking a dog at a dog park, dog owners could have parent-like experiences, gain physical and psychological comfort, maintain and strengthen their physical health, connect with people through dogs, gain supports from other owners, share meaningfulness with others, and strengthen and build family relationship.

Key words: walking a dog, park, fieldwork, social connections, relationships